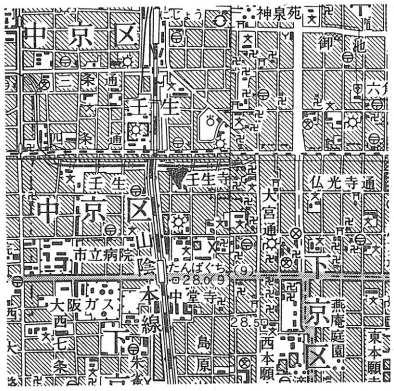
京都・壬生寺境内遺跡

1　所在地　京都市中京区壬生梛ノ宮町
2　調査期間　一九九〇年（平2）七月～九月
3　発掘機関　㈶元興寺文化財研究所
4　調査担当者　藤澤典彦・岡本広義
5　遺跡の種類　都城跡、寺院・町屋に伴う遺構
6　遺跡の年代　平安時代～近代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

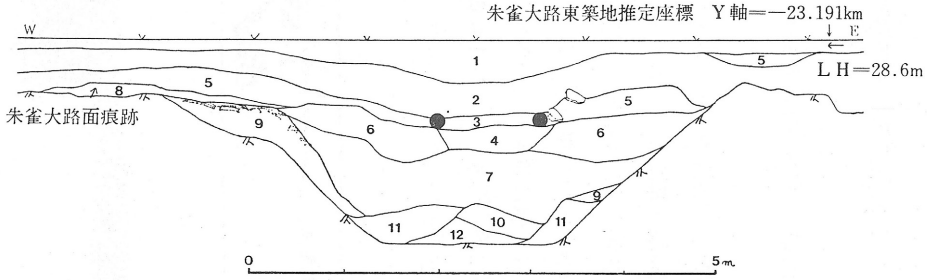
壬生寺境内遺跡は京都市のほぼ中央、大念仏狂言（壬生狂言）で有名な壬生寺の境内西側に位置する。平安京の条坊復原でいうところの左京五条一坊二町に相当する。今回の発掘調査は、壬生寺の庫裡及び老人ホーム建設に伴って実施した。



（京都西北・東北・西南・東南部）

検出遺構は平安京と壬生寺・町屋に関するものに大別できる。平安京関係の遺構は、朱雀大路路面痕跡とその東側溝などである（京

都市埋蔵文化財研究所作成の平安京条坊復原座標より推定)。出土遺物も、遺構と同様に平安京(平安時代)と壬生寺・町屋(鎌倉～明治時代)に関するものに分けられる。平安京に関する遺物は、朱雀大路東側溝やその周辺より出土した人形・斎串などの木製品と須恵器・土師器・人面墨書土器・土馬・馬骨などの祭祀遺物と瓦である。今回報告する蘇民将来札も、これらの祭祀遺物に混じって出土した。平安京の条坊関係遺構以外の遺構から出土した遺物は、壬生寺に関わる瓦が大半で、他に陶磁器・瓦器・土師器皿(灯明皿)などがある。



● 杭
1 整地土
2 暗灰褐色土層(小石・炮烙片混入)
3 暗灰色土層
4 暗青灰色粘土層
5 暗灰褐色土層(礫混入)
6 暗黄褐色粘質土層
7 暗灰色粘質土層(小石混入)
8 黄灰色粘質土層(瓦・小石混入)
9 暗青灰色粘質土層(祭祀遺物出土層)
10 茶褐色砂層(小石混入)
11 暗青灰褐色砂層
12 暗灰褐色砂層(小石混入)

朱雀大路東側溝東西断面図

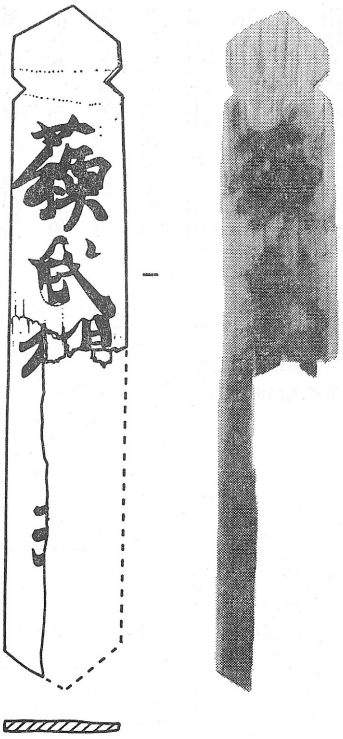
朱雀大路東側溝は平面的には往時の姿を留めず、壬生寺や後世の町屋の遺構のために、その上部や中心部は削平整形を受けており、この地点からの出土品は、鎌倉時代以降の遺物で占められている。溝の両岸と下部に東側溝としての痕跡を確認できたのみである。東側溝の路面側は、朱雀大路路面上に敷き詰められていたであろう小石や瓦等が崩れ落ち埋没した状態であり、後世の影響は受けていない。祭祀遺物は、上図の№9の暗青灰色粘質土層内に混じるように堆積し、その上面を覆うような状態で丸・平瓦が出土している。これらの瓦は形態的に平安時代前期のものが大半で、その中に奈良時代のものも若干混じっている。

このような出土状況より、蘇民将来札は後世の混入はありえず、伴出祭祀遺物の年代から平安時代初期、九世紀初頭頃のものと考える。これらの祭祀遺物は、平安京において行なわれていたであろう大祓に関わる遺物とみられ、また出土品でみる限り鎌倉時代以降と考えられていた蘇民将来札に関わる信仰が、平安時代初期においてすでに存在していたことが確認される。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「＼蘇民〔将カ〕□　□〔孫カ〕　(92)×15×2　033

上部は圭頭状にし、両側から切り込みを入れ、下部は斜めに切り



出している。右下半分は欠損する。また、上部の切込みの部分に紐状のものが巻かれていた痕跡がある。「蘇民」の二文字は判読でき、下部は欠損のために不明であるが、残された部分に墨書があり、三文字目は痕跡より「将」、また下部に残る若干の墨痕は「孫」の一部と考えられる。上部「蘇民」より下部の文字を推定すると、「将来子孫…」という言葉が考えられる。この蘇民将来札は、平安時代疫病神信仰の展開を考える上での貴重な資料となるであろう。

9 関係文献

岡本広義「壬生寺境内遺跡発掘調査の概要」(『元興寺文化財研究』三七　一九九一年)

岡本広義「壬生寺境内遺跡出土の蘇民将来札」(『元興寺文化財研究』三八　一九九一年)

(岡本広義)